■歴史を体感できる（かもしれない）「歴史社会学」講義のレポート課題

所属している大学で担当している講義「歴史社会学」での今年度の期末課題は、「自分の生年前後の任意の期間もしくは出来事につき、レポートを書きなさい」というものになった。

つまり、「『同時代史のなかの自分』について、自分の生まれた年やその前後に起こったことを Wikipedia（「〇〇年の日本」など）等で調べ、その年･期間全体、もしくはその年にあった出来事（事件･問題の表面化･その時代の作品･その時代を表した作品など）から一つを選び、歴史社会学的に論じなさい」という課題である。

レポート作成のガイダンス時には、その際に気をつけなければいけないこととして、

① 端的な事実の水準：　Wikipedia や当時の新聞報道などで分かることを十分に調べること

② 大きな社会的文脈の水準：　「後期近代」としての現れや政治史･経済史的状況を考え、大きな流れのなかで考えること

③ 「集合的な記憶」の水準：　その出来事や時期は人々にその後どう記憶され、メディアなどにどう表象されているか、そのことの意味は何か？　を考えること　（さらに、その時代がある別の過去をどのように表象し、集合的記憶としているか？を考えてもよい）

④ 誰かの「ライフ」の水準：　その時代を生きた具体的な人物の「生」のなかに歴史や社会をみること

⑤ 私の「ライフ」という水準：　今を生きる自分とのつながりや影響、意味を考えること　（自分を産んだ家族や親類、自分の周辺の人物を含めて考えてもよい）

⑥ ①～⑤を自由に組み合わせ、「同時代史の中の自分」としてレポートを作成すること

という 6 点を挙げた。

そうした期末レポートを要求するために、今年度の講義で論じたのは、（A）初期社会学から社会変動論へと展開していった歴史社会学の試みの紹介、大きな歴史的な位置づけである「近代」や「現代／後期近代」といった区分の意味や来歴、（B）集合的記憶、つまりメディアによって媒介された歴史表象、大衆文化の中の歴史、それにより我々に共有されている歴史認識や、それらの歴史学による成果との関連やその社会的な意味といった「歴史の社会学」の紹介、（C）ライフヒストリー論やライフコース論、ライフストーリー研究といった「ライフ」（と歴史）に関わる諸方法の紹介であり、その実践例として、二つの任意の時代（D）1930 年代と（E）1960／70 を集中的に論じた。

今回この二つの時期を取り上げる根拠は、私が考える「現代の起源」である。もちろんこれは一つの「選択」であって、別の眼で歴史を見れば、この二つの時期が絶対ということはない。

講義では、それらに関わらせながら、(F)「日本」という参照枠そのものの歴史的起源やその意味も論じたが（つまり、「日本社会」に限定して言及すること自体の意味をじゅうぶんに可視化すること)、そのあたりは入り組んでいてわかりにくかったかもしれない。

さらに講義はあと数回残っていて、そこでは駆け足で（G）1990 年代の「歴史の終わり」の意味、および（H）2001 年と 2011 年を歴史化するために考えなければならないことを論じる予定になっている。

1980 年代末から始まった冷戦体制の崩壊が一つの「戦時」の終わりを意味しているのだとすれば、それまでの「終戦」と同じく、大きな歴史認識の転機となったはずだった。だが、それはそこで歴史自体の「終わり」としても認識された。とすれば、それは本当に興味深いことだと思う。

また、「2001 年」や「2011 年」はどうだろうか？　衝撃的な事件が起こり、それが政治や民意を動かしたけれども、時間的に遙か遠くからみたとき、それらはどれほどの世界史的普遍性を持っているだろうか。(天邪鬼かもしれないが、皆が「衝撃的」と言えばいうほど、それを検証したくなる。「近すぎる歴史」については、逆に「体感できない歴史」としての視点から考えてしまうのだ)

こうした講義やレポートの狙いは、もちろんこの連載と同じである。つまり「歴史を体感する」ことである。まず講義では歴史を立体的に知ってもらうことに留意した。たんに歴史的事実やできごとの因果をたどっていくだけでなく、個人の人生にも歴史が現れ、一方で、個々のできごとは「近代」「現代」あるいは「後期近代」といった巨大な作用のもとで理解可能になることを論じた。また、私たちはそうした歴史を認識し、共有したり分断して保有したりしながら、社会のイメージとその未来のイメージを作り上げてもいる。つまり娯楽としての歴史もあるし、逆に社会問題に関わる歴史もある。そうしたこと全てが「立体的」ということの含意で、私たちが歴史に向き合うことの多様なやりかたを提示したというわけである。

だからレポートでは、その実践例を各自「報告」してもらう。歴史というものが、自分の経験と関連がありながらも、それを超えた時間の流れに関する事実やそれに対する意味づけなのであれば、自ら経験できているとはいえないだろう「自分の生年前後」は、まさに歴史の「最前線」ということになる。それに取り組んでみるという「お題」を出したわけだ。

「私」から出発してもよいが、経験や記憶がないので、それはほどなく失敗するはずだ。やはり端的な「事実」に対する調べ物からスタートしなければならない。けれども自分で選んだ対象であるし、たとえ体験がなくても、時期的にも自分を参照することで得られることが多い。レポート作成を通じて、何か「つながる」経験をしてもらいたいと思う。

自分の例でいえば、大学生くらいになるまで、自分が生まれた 1970 年初頭というのは、全く実感がわかないものだった。1970 年に自決する三島由紀夫は中学生の頃から読み始めていたし、東大全共闘に関する新書も数冊、父の本棚に置いてあった記憶があるが、それ

らは漠然と「昔のこと」だった。もちろん小学生の頃から熱心に本を読んだ戦国時代や戦争の時代の本のほうが遙かに身近だった。逆にこれほど近いはずなのに、実感と一番遠い時代になってしまったのである。

しかし、これは別の回で述べたいけれども、その後それらが結びついてゆくときの「分かってくる」感覚は自分の成長史の中でも貴重な経験だったと思う。「歴史を知ることは、おとなになることである」（佐藤健二）という言葉がぴったりくる。

もちろん個人史的な思いもあるが、「歴史とは何か」という問いは、改めてみれば、極めて社会学的な問いである。「知識」や「認識」が社会全体のありようとどのような関連性を持つかということ、私たちの存在それぞれがそれらの知識や認識のありようにどのように拘束されているのかということを考えることは、社会学では「知識社会学」や「社会意識論」といったりする。「歴史」もまた、一定の傾向を持った「知識」や「認識」である。歴史学者たちが「歴史学概論」などでこの問いに取り組んでいるとき、非常に社会学的な問いに取り組んでいるようにみえるのだ。

もちろん、はじめからそれは社会学の課題としてあるのではなく、専門家として歴史研究の実践そのものから「歴史とは何か」という問いが見えてくる部分もあるだろう。一方で、探究の実践と結びつかない歴史認識論は、非常に虚しい。

講義の最終回も、レポートの期限もまだ少し先だ。学生たちはこちらの狙いに応えてくれるだろうか。学生のレポートが提出され、成績も付け終わったら、（もちろん匿名にし、内容もある程度ぼやかしてのことだろうが）その紹介をこの連載でも行いたいと思う。